

追悼文

太田 敏澄 先生を追悼する

創価大学 経営学部 岡田 勇

太田敏澄先生は、本会にとって功労者のおひとりです。本会の前身となる日本社会情報学会(JASI)では、その設立時(平成8年)から会の中心人物として貢献しただけでなく、会長、副会長、表彰委員長、理事などの要職を歴任されてきました。そのため、JASIとJSISを統合して、現在のSSIを設立される際にはJASI側の委員としてご活躍されました。学会としては珍しい二つの学会の対等合併となった背景には、先生のご尽力がありました。

先生は、昭和41年東京工業大学工学部に入学され、昭和52年同大学大学院理工学研究科経営工学専攻にて工学博士を取得されるまで東京工業大学で学生時代を過ごされました。東工大時代の太田先生は、経営工学科・経営システム講座・松田武彦研究室に所属して、企業経営組織における集団行動でのリーダーシップの問題を主な研究課題として、理論的な側面のみならず、現実の企業を対象としたフィールド・サーベイを積極的に行われていました。特に当時、勃興期から成熟期に差し掛かっていた企業の情報システム部門における人材のキャリアパスの形成形態が、従来の理工系出身、文科系出身という採用基準とは異なる形態を示していることを発見されたことは、特筆に値する研究成果・業績と申せましょう。大学院修了後、東京工業大学助手、豊橋技術科学大学講師・助教授を経られて、平成5年より平成24年まで19年間にわたり、電気通信大学大学院情報システム学研究科教授を務められました。

学術面におきましては、これまでに著書20件、学術論文62件、国際プロシーディングス等81件、

解説論文・レビュー論文等18件、招待講演38件、学会口頭発表200件以上と多くの業績を残されております。特に社会情報学の発展に尽力され、社会情報システム学研究会を設立し、これまで22回のシンポジウム開催の中心的役割を担ってこられました。社会情報学という学問分野の黎明期に『社会情報システム学序説』『社会情報学のダイナミズム』の2冊の編著書を上梓され、学問分野の発展に大きな道筋をつけられました。またSCI、HICSS、WCSSなどの国際会議において、多くのオーガナイズドセッションを企画され社会情報学の国際的発展にも積極的に取り組まれてきました。

国内外で学術と社会を結ぶ活動にも積極的に取り組まれ、国内・国外の企業や組織と共同研究を実施しております。Asia-Pacific Telecomのプロジェクトでは、2002年より継続的にプロジェクトを実施し、インドネシアにおける農作物のサプライチェーン構築、農村地域への電子メール配達システムの構築、災害救援のための緊急災害医療システムの構築などにご尽力されました。また、国内共同研究では、中小企業と連携し推薦システムの開発や消費者インサイトの抽出など産学連携分野にも大きく貢献されました。

大学の運営についても大きな貢献を残されています。電気通信大学内のソーシャル・セキュア・コミュニケーション科学研究ステーション長、Social Informatics(社会情報学)研究ステーション長を務め、社会的に重要な研究課題に取り組まれてこられました。また、評価室副室長として、大学の中期計画や教育研究、管理運営等の評価

に関する諸施策の策定を行い、大学全体の教育研究水準の維持および向上に大きな貢献をなされました。

先生はこれまで数多くの弟子たちを育てられてきました。これまで修士号取得者は約60名、博士号取得者は13名を輩出しております。博士号取得者は、電気通信大学をはじめ、広島工业大学、創価大学、立正大学、東京都市大学、名古屋産業大学、奈良先端科学技術大学、立命館大学、インドネシアのパジャジャラン大学などにおいて、教授・准教授・講師・助教などとして教育研究活動に携わっており、太田先生の教えは後進たちに受け継がれて、教育研究の発展につながっております。

不肖、小生もまた、そのような先生の大きな潮流の中の小さな波しぶきの一つであります。先生が社会情報システム学研究会をはじめられた時(1995年)に、たまたま修士1年の最若手だったばかりに、先生の小間使いとして様々なことを経験させていただきました。可愛がってくださったのか、気が付けば JASI では共に理事だった時期もあります。

先生の思い出は尽きません。私の記憶にある先生は、学問に対する厳しい姿勢と人間に対する温かなおふるまいの対比でした。研究では本当に厳しい先生でした。私も博士論文の指導ではほとんど褒められた記憶がありません。テーマの妥当性からはじまり、論文の構成、果ては英語の発音に至るまで、それこそ一からすべてを教えていただきました。一方、学問を離れると本当に暖かなお人柄でした。飲み会ではいつも先生が酔われてうとうとし始めたら終了するという暗黙のルールがありました。弟子たちが結婚できないのをいつも心配され、私の時はまるで親のように肩の荷が下りたと仰っておられました。

私が海外生活するまでに国際感覚を身につけることができたのも先生のお蔭です。最初はカーネギーメロン大学での発表に同行していただき、その後、フロリダやハワイの国際会議で先生が企画されたワークショップをお手伝いしたこと

が思い出されます。ドイツの会議では、発表の合間に先生を有名なカッセルの水の芸術にお連れしました。

ある時、先生の研究室で助手になった時に、これからは一同僚として接しますからよろしくお願いします、と改めておっしゃられたことがありました。それ以来、二人きりになると岡田君とおっしゃられますが、それ以外では常に先生と呼んでくださり、敬語でお話をされておりました。先生の無常の温かさがいつの日か当たり前になり、先生ご不在の今、改めてその偉大さに気づく次第です。

社会情報システム学を築くのだという創始者の格闘があったからでしょうか、弟子たちの研究テーマは広範囲にわたっており、10名を超える博士課程の学生を同時に指導していた当時はほぼ休みなく、時には研究室に泊まり込んでおられました。先生の学問の祖にノーベル経済学賞を受賞したサイモンがおります。常々先生は、「サイモンは人間のモデルを作りたかったんだろう」と仰っておりました。それはまた先生の究極の目標だったのであると思っております。末弟たる私もその道が続くことで、先生への報恩とさせていただきます。

先生からの最後のメールは2016年1月22日13:48に発信されていたものでした。それは第22回社会情報システム学シンポジウムが成功裏に終わった直後のことで、代表を務められている富山先生をはじめ関係者に宛てたものでした。

「この度は、社会情報システム学研究会より、第22回社会情報システム学シンポジウムにおきまして、表彰および名誉代表の称号を戴きまして、身に余る光栄と存じ、篤く御礼申し上げます。このシンポジウムが回を重ねることができましたのは、偏に皆様のご指導およびご支援の賜物と存じ、心より感謝申し上げます。今後とも、何とぞ宜しくお願い申し上げます。」

最後まで弟子を気にかけ、学問の発展にご尽力された先生に心からの敬意を表し、追悼とさせていただきます。